

<前回>オリエンテーション

後期：キリスト教と経済・環境

後期オリエンテーション

3. 自然神学の拡張と社会科学

4. キリスト教思想と経済・環境

4-1：キリスト教思想から見た環境と経済

4-2：聖書と環境思想

4-3：聖書と経済思想

1：経済神学と聖書

2：契約思想の射程

3：イエス、パウロ、黙示論

4：賀川豊彦とキリスト教社会主義

4-4：現代神学の動向から

1：プロセス神学

1/8

2：政治神学

3：科学技術の神学

1/22

<前回>イエス・パウロ・黙示論

(1) 新約聖書の国家理解

1. 単一の国家論を導き出すことはできない。

古代キリスト教：迫害から国教化へ、敵対から協調へ。

2. イエス：論争における国家への言及→多様な解釈が可能、政教分離？

3. ヨハネ黙示録：迫害下の教会 → 国家との敵対関係

4. パウロの意義：市民社会のキリスト教、国教化以降の状況との合致

(2) イエスの譬えと経済—ぶどう園の労働者—

1) 「イエスの譬え」解釈史

1. イエスの宗教運動 → 「神の国」運動、ユートピア機能

→ 別の秩序をイメージ化する・既存の秩序を批判し相対化する

→ 開かれた共食

2. 「神の国」の譬え → 驚き、人間の期待を超えて生じる（驚くべき贈与）

新しい隣人理解（自己理解）の現実化としての「神の国」=隠喩としての神の国

8. 譬え解釈の手順

0) 予備的考察 1) 歴史性

2) 文学性：構造分析 / 譬えの文学的機能・効果 / 読解プロセスの再現

3) 思想性・思想理解: 神の国はいかなる仕方で見前するか、何をもちたらすか。

2) 「ぶどう園の労働者」の譬え（マタイ 20:1-16）

9. 0) 予備的考察：解釈されるべき譬えの範囲：1b-15、但し、1a はイエス自身の枠組みと考えるとよい。

10. 1) 歴史性：イエス時代の農業労働者の現実（日雇いの労働にありつける保証はない→「罪人」）。1 イデナリオンは一日の賃金として標準的。

11. 2) 文学性 :

・ 構造 :

・ 読解プロセス (聴聞プロセス) : 聞き手は、自分の体験で物語の進行をリアルに理解できる、あるいは自分自身の体験と重ねることができる。

12. 3) 思想性 : 「神の国の譬え」という視点で何がわかるか。

・ 最初に雇われた労働者の不満 = 聞き手の不満

・ イエスの答えに設定しての驚き

社会的慣例 (労働時間に比例した賃金) の無視とも見える主人の気前よさ

・ 神の国とは何か。

神の驚くべき恩恵 (一方的な贈与)。神の国に入ることは喜ばしい驚きである。

↓

13. 3) 思想から行動 (倫理) へ

・ 聞き手自らの状況についての批判的な反省

神の国の恩恵的性格と制度化の関わり : 神の国は制度の枠組みを超過している (= 気前よさ、開かれた食卓はここに生成する)。しかし、この気前よさは人間社会の中に制度をもたらさないか。

・ 神の国は、特に社会的弱者にこそ開かれている。神の国の弱者への共感。

公平・正義とは、機械的な平等か。最低限の生活の保証が優先する。

・ 「最低限度の人間らしい生活を保証する制度」の意義。

制度になることによって、それを悪用する人々は出てくる。しかし、それはこうした制度の存在意義を否定する者ではない。→ 近代の福祉国家の基本理念!

生活保護は、神の恩恵の制度化ではなかったのか。しかし、それを悪用する人間も生じる。

(3) パウロの共同体と経済

Richard A. Horsley, *Covenant Economics. A Biblical Vision of Justice for All*, Westminster/John Knox Press, 2009.

Part 2: The Renewal of Covenantal Community

The Assemblies of Christ in the Letters of Paul

The movement, beyond Galilee

non-Judean (non-Israelite) people became interested and wanted to join. Paul and his coworker ... were soon establishing fledgling assemblies (*ekklesiai*) of Christ among non-Israelite in the cities of Greece.

the assemblies of Christ were communities with political-economic aspects inseparable from the religious aspect. (135)

Most significant economically, members of the assemblies of Christ were city dwellers, not peasants, and were slaves or artisans or underemployed wageworkers, not farmers in an agrarian village. (136)

New Testament scholarship has tended to construct a general synthetic picture of the "Hellenistic world" of the Greek cities in which the apostle Paul carried out his mission and early "Gentile Christianity" developed. (137)

ekklesia, assembly, a network of smaller household-based communities

a nascent alternative society that separated itself from the dominant imperial society as much as possible. (140)

Paul advocated all of this community discipline and solidarity in the conviction that "the appointed time has grown short ..., for the present form of this world is passing away" (1 Cor. 7:29-31). ...

By that he did not mean that the whole cosmos, including societal life, was coming to a catastrophic end. He meant rather that the days of the Roman imperial order were numbered, that "the rulers of this age ... are doomed to perish" (1Cor. 2:6-8). (141)

There is no indication that any member of the assemblies of the Christ was from the extremely wealthy urban or provincial elite.

The picture in the book of Acts of a few well-off members is historically unreliable, certainly for the first generation or two. (142)

he understood the collection as the traditional economic reciprocity of villagers with one another. (144)

Conclusion

Ancient Israel's exodus from Egypt and Covenant on Sinai constituted a historical political breakthrough from a tyrannical system to a more egalitarian society of freedom. This breakthrough became paradigmatic for subsequent movements to achieve liberty and equality ... the breakthrough was economic as well as political. (171)

The Hebrew prophets protested rulers' violations of the people's economic rights and Jesus catalyzed a movement of covenant renewal among village communities under Roman imperial dominion. Again modern-day equivalents would have to be far more complex to address the continuing changes in the global economic system. (177)

A major factor in the demise of civil society in the United State has been the decline in activity by voluntary associations in general, including churches and church body. Mainline churches in particular have allowed themselves to become more and more marginalized in public life, while what is known as the Christian Right has become aggressive on (178) social and political issues. There is plenty of room for churches to become more active in economic and political matters in progressive (rather than regressive) ways, in the tradition of the covenant renewal communities addressed in Q, Mark, and Matthew.

three interrelated kinds of activity

First, they can expand the ways that they embody economic aspects of covenantal community. Already churches provide funds and services, for homeless shelters, food pantries, or temporary relief of extreme poverty.

Second, they can serve a prophetic role in protesting the abuses of corporations, or modestly an educational role in informing the public. To gain public attention in a society where corporations control the communications media

Churches' support of the United Farm Workers strike in the 1970s is one of the few well-known national campaigns on an economic issue.

Third, churches can take economic action as covenantal communities in the wider society.

in organizing communities against large corporations (179)

(4) 黙示論と経済

・バーバラ・ロッシング

「新しいエルサレムにおける生命の川：地上の未来に対する環境論的ヴィジョン」

1. 「黙示録の目的は人々に強く勧め勇気を与え、神の審判と救済を宣言し、希望と正義のヴィジョンをもたらすことなのである。」(207)

2. そのためにロッシングが注目するのは、黙示録が提示する、バビロンとエルサレムという対照的な二つの都市のヴィジョン、二つの対照的な政治経済学のヴィジョンである。

3. ローマ帝国の「現実化した終末論」(永遠のローマ、ローマの平和)。

ローマ帝国のグローバルな全能性は地中海の海洋交易が支えていた。黙示録は、このローマの全能と永遠性を転倒している。

・都市の女性的形姿(人格化)による描写。「その主要な論争は、政治的で経済的であり、性差に関わるものではない。」(209)

・バビロンの政治経済学、バビロンの環境破壊。

「バビロンの売春の対する黙示録の批判は、性的ではなく、ローマの搾取的な貿易と経済支配に対して隠喩的に向けられている」(209)、「奴隷制と奴隷交易に対するもっとも明確な批判」

・森林伐採、「裸の荒地」(17:16)

68-70年のユダヤ戦争についてのヨセフスの証言。

ローマは征服された土地を森林伐採した。グローバルな森林伐採。

4. バビロンに対する新しいエルサレム、「もはや海はない」(21:1)

「神話論的な恐れ」は、黙示録にとって、海の主要な批判ではない。「黙示録は海を政治的に描いている」、「悪の場所」「交易船が航海する場所」

「もはや海はない」=「ローマの貨物船と交易の終わり」

・別の経済的ヴィジョン、新しいエルサレム(生命の都)は環境論的。

「テキストがわれわれに呼び起こすのは、都市的で環境的な危機、グローバルな市場経済の危機のただ中における神への信頼である。」(214)

・贈与的経済(a gift economy)

生命の水をすべての人に値なく飲ませる。われわれがエコシステムに対してダメージを与えることへの預言者的な批判

4 - 3 : 聖書と経済思想

4 : 賀川豊彦とキリスト教社会主義

(1) 賀川豊彦と聖書・経済・政治

A. 賀川豊彦全集刊行会編『賀川豊彦全集』キリスト新聞社。

「聖書・経済・政治」関連諸論考

4 : 「宇宙創造と人生再創造」(1936)

キリスト教兄弟主義、初代キリスト教徒の労働精神

「生命宗教と生命芸術」(1947)

社会生活の反映として見たる宗教、基督教社会主義の思い出

「社会革命と精神革命」（1948）

日本再建と社会事業の重要性、女性解放の根本精神、民主革命における労働組合の使命

「天の心・地の心」（1955）

7：「聖書社会学の研究」（1922） 「女性讃美と母性崇拜」（1937）

8：「貧民心理の研究」（1915） 「精神運動と社会運動」（1919）

9：「人間苦と人間精神」（1920）

国家禁酒論、工場立憲運動、日本における賃金労働者の不安、婦人労働者の解放、労働者の負傷の問題、児童虐待防止論、貧民心理について、労働者の心理、人間建築論

「主観経済の原理」（1920）

経済心理、マルクス主義、国際組合の原理、生産者議会、消費者議会、賃金制度廃止論、産業戦争における無抵抗主義

「生存競争の哲学」（1922）

戦争の哲学、階級争闘と社会進化、

10：「労働者崇拜論」（1918） 「社会病理」（大正末） 「救貧問題」（1928）

「基督教社会主義」（1927） 「世界平和論」（1906） 「世界国家」（1948-1954）

11：「自由組合論」（1921） 「家庭と消費組合」（1927） 「社会構成と消費組合」（1927）

「医療組合論」（1936） 「国民健康保険と産業組合」（1936）

「キリスト教兄弟愛と経済改造」（1936） 「魚業組合の理論と実際」（1940）

「産業組合の本質とその進路」（1940） 「日本協同組合保険論」（1940）

「新協同組合要論」（1947）

13：「中国復興の日本」（未出版原稿・戦時中） 「人格社会主義の本質」（1949）

B. 賀川豊彦(1888-1960)の生涯（略年譜）

1903：兄の放蕩により15歳の時に賀川家破産

1904年（明治37年）：日本基督教会徳島教会にて南長老ミッションの宣教師 H・W・マヤスより受洗。

1905年（明治38年）：明治学院高等部神学予科に入学

1907年（明治40年）：神戸神学校（後の中央神学校）に入学。

1909年：神戸市新川のスラムで路傍伝道を開始。

1911年（明治44年）：神戸神学校を卒業

1912年（大正元年）：一膳飯屋「天国屋」開業。

1913年（大正2年）：ハルと結婚。

1914年（大正3年）：渡米、プリンストン大学・プリンストン神学校。
1915年（大正4年）：『貧民心理之研究』出版。
1917年（大正6年）：帰国。神戸スラムに戻り無料巡回診療を開始。
1919年（大正8年）：友愛会関西労働同盟会を結成（理事長）、日本基督教会で牧師の資格。
1920年（大正9年）：自伝的小説『死線を越えて』出版、ベストセラー。神戸購買組合（灘神戸生協を経て現・コープこうべ＝日本最大の生協）設立。キリスト教系業界紙、キリスト新聞（発行元：キリスト新聞社）を設立。
1921年（大正10年）：神戸三菱造船所（現・三菱重工業神戸造船所）・川崎造船所（現・川崎造船神戸工場）の大争議を指導。
1922年（大正11年）：杉山元治郎とともに日本農民組合を設立 1923年
1923年：関東大震災罹災者救済活動。
1926年（大正15年）：労働農民党結成（執行委員）
1929年（昭和4年）：日本基督教連盟の特別協議会における「神の国運動」を議決。賀川は「百万人の救霊」を目標として、1932年（昭和7年）まで全国を巡回伝道。
1941年（昭和16年）：リバーサイド日米キリスト者会議でアメリカ合衆国のキリスト教会に「アメリカ教会への感謝状」をおくった。
1943年（昭和18年）：憲兵隊による取調べ、国際友和会日本支部解散
1945年（昭和20年）：戦意昂揚音楽礼拝が日本基督教団戦時活動委員会の主催（8月16日）、賀川も奨励者として名を連ねる。
1945年・戦後：東久邇宮内閣参与、勅選貴族院議員。日本社会党の結成に参画。
晩年は世界連邦運動に取り組む（1947年と1948年のノーベル文学賞の候補、1954年から1956年のノーベル平和賞候補者として推薦）

（2）賀川豊彦の「友愛の政治経済学」

0. 賀川豊彦『友愛の政治経済学』加山久夫・石部公男訳、日本生活協同組合連合会、2009年。Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics*, Harper & Brothers, 1936.

1. 「序文」

・「今日」「キリスト教の教えが挑戦を受けている時代」、「信条が重要ではないというのではなく」「社会での贖罪愛の適用が必要なのである」、「生産者と消費者との間の溝を兄弟愛をもって架橋しなければならない」、「物質主義的資本主義と物質主義的共産主義は共に放棄されねばならないのである」、「心理的ないし意識的な経済を通して新しい社会秩序に至る新しい道を見出そうと試みた」（17）

・「1936年4月、コールゲイト・ロチェスター神学校のラウシェンブッシュ基金の招きで「キリスト教的友愛と経済再建」という表題のもとに4回にわたって行なった講演」（18）

2. 「第1章 カオスからの抜け道はあるか」

・「世界は混沌とした状態にある」、「今日の貧困は物の欠乏によるのではなく、豊かさから生じている。物財や機械の過剰生産、過剰な労働や知識層の存在からくる苦しみである」「富はごく一握りの人々の手に集積し、社会の一般大衆は、失業、不安、従属、不信の世

界に蹴落とされている」、「レッセ・フェール政策」（19）

「世界の諸問題が」「今では一つであり、一つのユニットとして取り扱われるのでなければならぬ」という認識」（20-21）

「今日のキリスト教会が人間の生活全体を満足させる福音を説いてはいないことを告白しなければならない」、「教会が近代において愛の実践の使命を果たしていたなら、マルクス主義が現在の規模にまで拡大するわけはなかったであろう」、「キリスト者は世界的な友愛運動において、愛の有効な行動を展開することによって、この挑戦に対応していかなければならない」（21）

・「禁教の理由は、さらに4世紀前、イエズス会の宣教師が来日した際」、「政府は3世紀以上にわたりキリスト教にたいして門戸を閉ざしてきたのである。その結果、日本の人々はいまなおキリスト教にたいして著しい偏見を持っている。いわゆるキリスト教国はいまなお東洋諸国を経済的・政治的に侵略しており、私たち東洋人にキリスト教国たいする古来の偏見を呼び覚ましている」（22）

・「消費協同組合、質庫信用組合、学生信用協同組合を組織した」、「これはキリスト教的兄弟愛の実践にほかならない。日本は変わりつつある。過去2年間、私たちは宗教の復興を経験しつつある。すべての宗教に活気があり、人々のあいだに広がっている」、「日本では、キリスト教徒の数は少ないが、キリスト教の影響力は、今日、強くなってきている」

「社会活動家の多くがキリスト者であること」、「キリスト教のハンセン氏病療養所もいくつもある」「日本労働同盟は東京の教会で始まった」（28）

・「唯物論的な共産主義とキリスト教批判に、率直に向き合わねばならない」、「私はこれらの急進的な人々のうち、キリスト者として踏みとどまった、ほとんど唯一の者である。ほとんどの人々はあれこれの理由で教会を離れていった」（30）

「再びキリストへと連れ戻すまで、彼らの期待を満たすような、現代のキリスト教的プログラムのために何が必要なのかを学ばなければならない」（31）

・「最近のロシア、ドイツ、英国の労働者政党の政府が、世界を現在のカオスから救い出して、いまや至上命題となっている経済再建を為しとげる力を持っていない、と結論せざるを得なくなった」、「ニュー・ディールの「管理資本主義」」「資本主義は、改善された形であっても、恒久的な社会秩序に属するものではないこと」「資本主義は自由競争の原理に基づいており」、「収奪システム」、「僅かな人々の手中での資本の蓄積」「上流階級ないし有閑階級を産み出す」、「資本の集中とともに、勢力は支配階級に集中する」、「無産の低賃金労働者が大半を占め増え続ける」（32）

「私たちは、唯物論的共産主義も政治的社會主義も達成し得なかった、そして信条主義的キリスト教の力も及びえない、社会の再建、新しい道を、探さなければならないのである」（33）

3. 「第2章 キリストと経済」

「I 主の祈り」

「ある人々は、キリスト教の真の実体は全く宗教的であって、経済生活と何の関係もない、と言う」、「もちろん」「違いはある」、「しかし、キリストはそのような態度をとってはいなかった。彼はしばしば、経済の基本的な事柄を取り扱っている」、「食事」「食卓」「日

ごとの糧への祈り」(34)

「われらの日用の糧を今日も与えたまえ」。これにつづく三つの祈願における「われら」という代名詞は広く人類を意味する。私たちは自分自身のバンのために祈らねばならない。もし日々の生活をなし得ないのであれば、宗教は無意味になる」、「また、自分たちの小さな共同体だけのための祈りであってもいけない」(35)

「私たちは赦しを、完全な赦しを必要としている」、「経済的な協働をとおしてである」、「兄弟たちが誘惑に陥らないように、環境を変えていかねばならない」、「よい協同組合があるときには、盗みへの欲望がなくなる」、「スウェーデンやデンマーク」、「大都市があると、そこには煙で汚れた文明がある」、「すべてのことが、主の祈りの6項目に含まれている。その中で、キリストは経済について素晴らしい教えを与えてくれているのだ」(36)

「II 価値の7要素」

「客観的世界と絶対的世界のあいだに、自然と神のあいだには、七つのチャンネルがある。生命、労働（またはエネルギー）、変化、成長、選択、秩序（または法則）、目的がそれである。これらはあらゆるタイプの経済に通じる価値の7要素である。キリスト自身が価値のこれらの七つの要素への基本を私たちに示してくれている」(37)

「キリストはここで、経済的価値の基本原理は生命価値をもって始まることを説いている」「身体の経済は、生命を保持するための活動が価値基準となる」「生命の保全のため」、「食物、衣服、住宅の基本的ニーズが」「公衆衛生施設、警察、消防、反戦施策、その他の生命保護のための手段が必要になる」(37)

「肉体労働の価値は生命の保全と密接に結びあっている」(37)、「失業者といえども搾取されてはならず、雇われると時には、生活給が保証されるべきだ、とイエスは主張する（マタイ xx.1-16）」(38)

「変化や交換の価値」、「交換は非常に重要であり、そのため経済はほとんどこれを基礎にして考えられるようになってきた」(38)

「イエスは、銀行に言及し、利潤やそれが生む利息について述べている」(38)、「彼は、この注目すべき成長という価値原理について私たちの意識を呼び覚ます。イエスが指摘しているように、成長の法則は自然の中にある」、「生産の増大は、交換システムをとおしての人類の互助組織によって、量的にも質的にも促進されている」(39)

「変化や成長が容易に行なわれることは、資本主義文化の特徴である。しかし、単なる変化や成長は必ずしも幸福をもたらすものでも、人格の成長に貢献するものでもない」(39-40)、「選択という価値の第5の要素」「選択を対象とする経済が存在してくる」、「選択について」「自己を検証し、自分の心を吟味するように注意をうながしている」、「職業や家業の選択のための効率の経済の可能性」、「社会立法や職業ガイダンスなど、昔の物々交換経済の時代には考えられもしなかったことである」(40)

「商法、銀行法、協同組合法、労働法など、今日の各種の社会経済法規は、これらの法律によって創設される権益と共存し、それらの権益は社会的意識から発現してきたものである」「権益の経済」「ここにおいて、政治と経済は結びあい、勢力と価値の諸活動が複雑に関係しあう」「社会立法の経済」(41)

「目的価値の変化は文化の類型に影響する」、「文化にさまざまな様式が現れる。同じこ

とは宗教の発展についても言える」、「神への奉仕がそのための手段としての〈富〉の追求と両立することを強調した」、「経済生活が、神の目的を成就すべき宗教生活と一致しないとき、その大切な意味を失うと、イエスは述べていたのである」(41)

「これら価値の七つの要素は、私たちが経済システムを検証するさいの基準である。それらは主観的世界から客観的世界に至る七つの通路である」(42)

「III 十字架の愛と経済の価値」

「イエスの宗教の偉大さは」「彼の意識が神ご自身のそれと一つであったこと」、「人間のあり得る全てを体現したことであった」、「イエスの十字架は、神の愛と人間の愛の完全な融合を示したものである」「贖罪愛」、「神の視点から捉え、人類を救済する神の責任の重荷を共にしたのである」、「私たちはここに個人的価値運動と社会的価値運動の完全な一致を見出す」、「キリストの贖罪愛は社会全体を救うための個々人の魂の救いを意味する」、「十字架の愛は経済の価値の七つの要素をすべて含む」(42)

「近代資本主義体制は十字架のもつ経済的含意を無視し、それを経済の価値とは無縁の宗教的な事柄にすぎないものとして、十字架を足下に踏んづけてきた」、「神の国のためのキリストの計画」(43)

「ゾーマは民族の全体や社会の全体をも意味する」、「十字架を背負う愛が社会経済の原理であると認められるならば、個人の所有権や相続権はすべて神と社会に献げられるものとなり、利潤や収益はすべて神に属するものと解され」、「より大いなる社会愛」(44)

「もしも私たちが神に帰依し、手足を動かすことを拒み、それでいて神は私たちを助けてくださるだろうと信じているとすれば、それは迷信以外の何ものでもない。結局のところ、信仰とは神による可能性を信じることである。この可能性を信じることそれ自体が人間の活動を要求する」、「神の呼び起こされた愛の結果」(45)

「愛は人間のチャンネルを通して流れ出る神の働きなのである」、「贖罪愛は全体的な意識、即ち神意識から出る。だから、神より来るものである。この愛は、人間の意識のチャンネルをとおして流れ出るが、神の意図に従っている」、「愛の可能性への信仰」、「私たちが私たち自身をとおして神に働いてもらうようにするのでなければ、神ご自身もその可能性を実現することはできない」、「おのれの神信仰が言葉だけの皮相な信仰にとどまる、自己中心的な人たちがいる」、「神の創造の業、とくに人間を愛し得ないなら、その愛は自己矛盾を抱えている」(46)

「行動的に考えなければならない」、「神は愛であるという信仰と知識は、愛の行為においてしか認識され得ないのである」、「愛こそが、七つの価値要素を統合する。愛において、絶対的存在が相対的存在に語りかける」(47)

「プロテスタントは信仰を強調しながら、神の絶対的な力を制限する。他方、カトリックは愛を強調しながら、神の愛に制限を設ける。これらの失敗にもかかわらず」(48)

「IV パウロの経済価値の観念」

「キリストは神を第1にしたが、そうすることで、経済を無視することはしなかった」、「私たちの経済生活を神中心のものにしていくのでなければならない」(48)

「キリストの死後、宗教的共産生活において実践に移された。パウロの 13 の書簡を学ぶと、初期の教会が愛他的な労働経済を実践していたことがよく分かる」(49)

「贖罪愛の遺産の継承」「貧しい人々を助け、宗教的協働生活を実践することが至上命令

であると考えた」、「宗教生活と社会生活のあいだには何ら矛盾を感じていない」、「信仰が」「抽象的なものであれば」「両者に矛盾を感じるかもしれない」、「私は信仰を信条の事柄とは考えない。宗教生活は神の愛に依拠する生の全体であると私は信じる」(50)

「V 贖罪愛と経済革命」

「中世の汚濁や近代資本主義体制の侵入」(51)

「ローマ法の原理は、世界を救おうとしていた贖罪愛の自覚的生活を押しつぶしながら、機械的な資本主義の支配へと続いてきた」

「今日、多くの教会はその贖罪愛をもっぱら信条的なものとして保持することによって、楽な思いをしようとしている」(52)、「残念ながら、教会組織の大半は、不当利得社会の特権階級に依存している」、「キリスト教会の存在がなぜ脆弱で、現代世界の騒乱になかで教会がなぜ無力なのか、を明らかにする」(53)

4. 「第3章 唯物論的経済観の誤り」

「I 唯物論的経済観の無力性」

「アダム・スミスによる宗教と経済の分離は一時期成功したかに見えた」、「しかし」、「宗教と経済の二つの領域は一緒になり、一体として動くのでなければならない」(54)

「過去の過ち」「それは経済が人間の意識から独立していると想定し、経済学を記述的な科学として取り扱ったことにあった」、「あまりにも自然主義に傾斜したため」

「マルクスは、経済学を自然科学として取り扱うことができると考え、すべて唯物論的決定論で分析できるとする特殊な方法論を擁護したのである」、「この時期、経済学者と同様に、神学者も、経済学は自然科学の領域に入れられるべきだと考えていたのだからである」

「経済行為は、人間の意識の発展レベルとともに変化する、と私は信じる」、「1国の文化はそう容易には説明されない」(55)、「単なる物質生産様式だけに基ついて文化的社会を定義しようとするのは、大きな誤りである」(56)

「II 社会的意識の覚醒」

「人間の精神的な目覚めが発明や発見をとおして、私的所有権や遺産相続や契約権などの概念に基本的・革命的な変化をもたらす」、「プロテスタンティズムは「資本主義的文化の勃興に道を開いたのである」」(56)

「16世紀の契約や相続の概念の基本原理は、大規模な大量生産の利用によってもたらされたカオスのなかで失われ、新たな賃金奴隷階級を創設することとなった」「社会正義の感覚の喪失」(57)

「III 心理的経済」

「自覚的な社会意識は生産と消費という二つの角度から発展してきた。経済心理の動きは、以前には夢想だにできなかった先物買いの操作を考案した」、「まだ存在しない物を取り扱うのである。貨幣の流通は人間の信用意識に依存している」

「唯物史観の概念は、従前の社会を説明するには役立ったかもしれないが、時間を含む心理的経済を取り扱う社会経済的社会の現象を説明するためには役に立たない」、「かくして、唯物論的経済は心理的見解に席を譲っていかねばならない」(59)

「連帯性を欠く民族は株式会社をつくることができない」、「互助の意識が発展していな

い社会では、時間を含む交換のすべて、それに心理的な公正を要する不動産市場とか株式市場とかは不可能になってくる」（60）

「IV 身体、感覚、意識の経済」

「経済的な欠乏が心理的であるという事実」、「経済のさらなる心理的文脈」、「人間の欲求」（60）

「「身体経済」は「感覚経済」に進展する」、「感覚経済」は「意識経済」と呼ぶものに進展する」、「人間の関心は感覚的満足レベルから知的レベルへと進む」

「追憶の感情を満たすために、私たちはあらゆる種類の記念碑や記念品をつくる」（61）

「唯物論では現代社会の再建の問題は解決できない」、「唯心論的な経済史観」、「ある時代の文化は、物質的な生産・分配・消費の形態を発展させ制御するその時代の人々の意識生活の覚醒度によって、決定される」（63）

「V 資本と労働」

「自然の土地はそのままでは人間の生活には価値を持たない」、「社会的な心理がその価値に作用し始める」（63）

「VI 原始的文化の精神的基礎」

「共通言語」「ギルド」「キリスト教的な友愛関係」（66）

「VII 機械文明史の唯心史観」

「マルクスの唯物史観には根本的な訂正を加える必要を感じる。社会的エネルギーの表象である貨幣の力は、確かに、物質的な事柄とされてよい。人間の貪欲として知られる心理的要因が、考えに入れられねばならない」（67）

「マンモニズムは強欲な自己中心的現実主義を意味する」、「資本主義を純粋に唯物的と考えるのは大きな間違いである。そこに横たわっている心理的側面はずっと重要である。資本主義のシステムは、結局、自己中心的な搾取のシステムにほかならない」（68）

「VIII 宗教的価値と経済的価値の結合」

「生命、労働、変化、成長、選択、秩序、目的という七つのタイプの価値は、人間の意識の発達により発展する」、「客観的世界と主観的世界を連結する七つの通路」、「チャールズ・ダーウィンの進化の世界はこれらの価値の七つのタイプの法則を認めている」

「経済的価値は主観的ならびに客観的価値から分離されたものではない。それはむしろ、人間の意識活動全体の基礎なのである。意識経済を拒否するどんな経済観も、十分ではない」（69）

「共産主義と科学的社会主義はともに、宗教的な概念に関わるある宇宙観を持つ」、「さまざまなイズム」「の創始者や賛同者は、それぞれの仕方、宇宙におけるある種の宗教的価値の形態を追っていることを、見落としてはならない」、「彼らのうちに宗教のある面への類似性を見ることができよう」

「唯物論的経済学と唯心論的経済学」「本質的な違いは」「一方が決定論的宇宙観を選び、他方が可能性への信仰に基づく目的論的見解を選ぶところにある」

「今日のように、人間の意識が目覚めた時代においては、人間の交換行為と人生の目的は分離され得ない」、「私たちの次の段階は」「経済的価値である交換価値を宗教的にしていくこと」、「協力の経済が社会的連帯の意識に基づいていること」、「この機械文明を今一度精神化する力」（70）

5. 「第4章 変革の哲学」

「I 暴力革命」

「暴力革命が、経済革命を遂行することに失敗した七つの理由」(71)

「II 経済革命」

「人間の意識の革命」「所有権や相続や契約権と関係のある富や職業に関する理念に根本的な革命が生じなければならない。これらの考えの革命が宗教的意識に基礎づけられ、それが社会的意識を構成するまでに発展するときに、経済革命ははじめて完全に実現される」(74)、「真の経済革命は、キリストにおけるごとく、いのちについての目覚めた意識が社会化されるときにのみ達成される」(76)

6. 「第5章 世々を貫く兄弟愛」

「I 愛の実践」

「キリスト教史の最たる特徴は兄弟愛の展開である」、「愛餐の物語」、「愛餐は特に失業した人を助けるために企てられたものであった」、「失業者を救済する義務」、「魚とパンの食事」(77)

「II 修道会」

「6世紀以前については詳しくは分からないが、真のキリスト教的兄弟愛を明らかにする修道院との連関で、多くが保護され展開されていたこと」、「現在のセツルメントのような働き」(79)、「いわゆる「暗黒」時代におけるキリスト教の進展の事実は、キリスト教的友愛運動だったキリスト教的労働者ギルドと関係があると考え」(80)

「III ゴシック建築とキリスト教的兄弟愛」「IV 再洗礼派の運動」「V プロテスタント自由主義」

「VI キリスト教的友愛の経済実践」

「キリスト教的友愛の発展史」「ほとんど例外なく、労働は尊重され、金銭への利子は許されなかった」(85)

7. 「第6章 現在の協同組合運動」

「I 開かれたコミュニティを」

「現代の協同組合は、中世の組合（ギルド）の延長線上に改良され発展してきた」、「中世のギルド」「その組織は非組合員にまで兄弟愛を及ぼすことはなかった」、「真の協同組合の基本原則の一つはそのサービスをコミュニティ全体へ広げることである」(87)

「II ロジデール・システム」「III ライファンゼン・システム」「IV 日本における協同組合運動」

「V 強制協同組合」

「収奪の無い計画された経済の体系」、「徹底した教育運動から始めなければならない」、「意識的な自覚と自発的な行動なくしては、協同組合運動は達成されない」(93)

「VI 協同組合運動に対する反対」

「移行のプロセスは、だれにも苦難を及ぼさないよう、極めてゆっくりとしたものとなるだろう」、「資本主義的なやり方から協同組合の方式へと、考え方を変えなければならない

いのである」(96)

「VII 精神的運動としての協同組合」

「協働組合経営は組合員の宗教的な社会意識の目覚めに依存するであろう」(98)、「友愛意識の復活、キリスト教的兄弟愛の復活」(99)

8. 「第7章 兄弟愛の行動」

「I 多様な互助組織の必要性」

「今日存在するのは資本主義である。資本主義は無限に自然資源がある間はまだよいが、私たちが自然の資源を使い果たしてくると、悲惨と貧困の恐ろしい状態が起こる。そうすると、生活を護り、経済状態を適正に公正に調節していくために、兄弟愛の運動が不可欠となる」(103)

「II 保険協同組合」「III 生産者協同組合」「IV 販売者協同組合」「V 信用協同組合」

「VI 共済協同組合」「VII 利用協同組合」「VIII 消費協同組合」

9. 「第8章 協同組合国家」

「I 協同組合国家の精神的基盤」

「友愛意識の覚醒の程度」、「贖罪愛の精神的基盤がない限り、成功の可能性はほとんどない」(128)

「II 協同組合国家」「III 協働組合連盟」「IV 産業議会」「V 社会議会」「VI 内閣」「VII 選挙」「VIII 警察制度」「IX 資本主義から協同組合へ」「X 私有と個人企業」「XI 慈善と教育」

10. 「第9章 友愛に基づく世界平和」

「I 戦争の原因となる経済」

「縮小してゆく地球上で国民間の争いを続けるのは不毛なこと」(148)

「宗教的対立によって惹き起こされた戦争もあった」、「世界平和に対する脅威として現存する状況は大部分が経済的なものである」「人口過剰」「自然資源の欠乏」「国際金融の問題」「貿易政策の摩擦」「輸送政策の摩擦」(149)

「最近の農業不況の原因は、食物の生産過剰によるものであった」、「世界列強がよき隣人国として共に手を結ぶならば、人類が飢えるような事は決してないであろう。誠に残念なことであるが」(150)

「II ロイド海上保険協会を見よ」

「III 協同組合貿易と世界平和」

「国際信用銀行」(154)、「諸国民を教育していく問題に帰着」(155)

「IV 国際経済会議」

「経済連盟」(156)

「V 国際協同組合」

「現在の傾向は、弱い国々の窮乏を利用し、それらの国を足下に踏みにじることにある。これは、個人に対してであれ、国に対してであれ、キリスト教的態度ではない」(158)

「VI 結論」

「猜疑心」「軍備に莫大な支出をしている」、「私たちの意識において経済がまだ精神化されていないからにほかならない」

「経済活動のすべてを、贖罪愛の意識的行為によって浄化し合理化すること」(159)

「世界の経済体制を「協同組合化」する努力をいまずぐ始めよう」(160)

<参考文献>

1. 雨宮栄一『青春の賀川豊彦』(2003)、『貧しい人々と賀川豊彦』(2005)、『暗い谷間の賀川豊彦』(2006年)新教出版社。
2. ロバート・シルジェン『賀川豊彦——愛と社会正義を追い求めた生涯』新教出版社、2007年。
3. 阿部志郎・雨宮栄一・武田清子・森田進・古屋安雄・加山久夫
『賀川豊彦を知っていますか』教文館、2009年。
4. 賀川豊彦記念松沢資料館編『日本キリスト教史における賀川豊彦』新教出版社、2011年。
5. C・H・ジャーマニー『近代日本のプロテスタント神学』日本基督教団出版局、1982年(原著・1965年)
第二章「近代における日本自由主義神学とその社会に対する関心」
海老名弾正(一八五六—一九三七年)
大塚節治(一八八七年生まれ)
賀川豊彦(一八八八—一九六〇年)